

道具とものづくりから暮らしを考える



特集

針仕事

特別號

小森和裁研修塾

京都・西陣で守り伝える 技と心

QUALITY MAGAZINE FUDEBAKO

こちらの冊子は、十年以上前に制作されたものです。

そのため、一部冊子の中で記載している入塾についての規定や、制度、スケジュール等が現在とは異なります。ただし、和裁への思いや、考え方、取得できる資格、きものの仕立て方や流れに変わりはありませんので、参考までにご覧頂ければと思います。

2023年 10月吉日

小森和裁研修塾

小森からのメッセージ



代々引き継いできた心をもっと広げていきたい。
和裁の技術と心。

私たちだけでなく、日本全国の人たちへ、
私たちから若い人たち、そしてその子孫まで

「この伝統を永久に受け継いでいきたい」

小森の想いです。

「和裁は手と心に貯金をすること」。
和裁士であった私の父（故人）がよ
く言っていた言葉です。それは「和裁
の技術を学ぶことを通じて心を磨き、
礼儀を学び、文化を知る」という意味
なのです。

きものは一つとして同じ物がなく、
生地によって、得意先によって縫い方
も違います。とくに京都には、特殊な
きものや衣裳の仕事もたくさんありま
す。そうした仕事を確実にこなすには
技術はもちろん、日本文化を深く理解
することや、着る人を思いやる心を養
うことがとても重要なのです。

実は最近、そんな大切な事を学べる場
がすっかり少なくなってきました。
そのような中、私たちは、小森家族5
名を中心とするスタッフの多くが国家
検定一級技能士の資格を持ち、一流の
技能をアットホームな雰囲気の中で教
えています。

ちやうど自分の性格が形づくられる
若い皆さんに、たつぷりと手と心に財産
を持たせてあげたいと私は思います。

株式会社 小森和裁研修塾

代表取締役 小森 達男

CONTENTS

はじめに きものというもの	1
きものを仕立てるということ	2
きものができるまで	3
和裁塾というところ	5
仕立ての見所	6
京都ならではの仕事	7
受け継がれる心	8
人間として美しく	10
明日の和裁士をめざして	12
5年間で学ぶこと	14
取得できる資格のこと	14



ふでばこ14号
特集「針仕事」より

はじめに

きものというもの

和針の素晴らしさはきもので発揮されます

きものには大きく分けて反物と絵羽物があります。反物は付け下げや小紋、色無地などです。巻かれた状態で売られていて、選ぶときは肩に掛けるなどして顔映りを見ます。

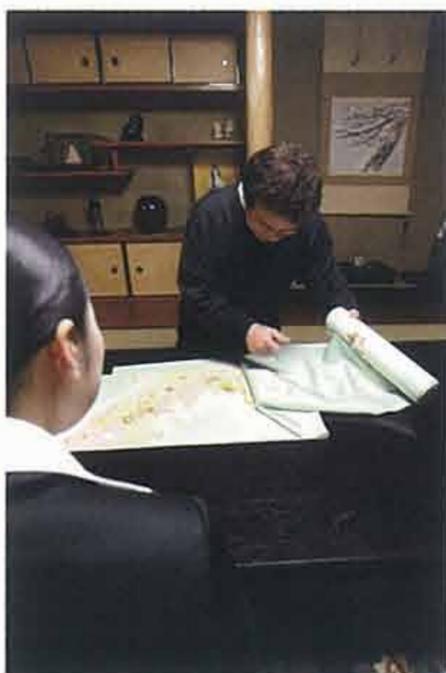
一方の絵羽物は、きもの全体で一つの絵を表現しているのです。選ぶには、きもの形になっている必要はありません。さかのぼって、模様を付けるためにも先ず、白のままの生地をきもの形に縫わなくてはなりません。きものづくりには多くの人手がかかるものですが、とくに絵羽物は工程が細かく分かれ、「縫う」「解く」が繰り返されるきものです。

さて、呉服屋さん(呉服売り場)できものを買うと、からだの寸法を測り「お仕立て」がされます。このお仕立ては、きものをつくる職人さんとは別に、専門の仕立て屋さんがあるもので、ふつうは呉服屋さんを持ち込んで依頼します。着るための仕立てなので、当然ながら下絵羽や仮絵羽とは異なる仕事があります。

買う人にとっては、きものほきもの。ひとつの仕事に見えるものですが、「きものをつくる針仕事」と「きものを仕立てる針仕事」は、それぞれの職人さんによって、きわめて高度な技術でなされているのです。

きものを仕立てる ということ

わずか針一本で きものは縫い上がります



持ち込まれたのは友禅の訪問着。広げて素材を確認し、部材が揃っているかを見ます。

1枚のきものを縫うのに、だいたい40メートルの糸を使います。40メートルというと、お店に並ぶ一般的な手縫い糸（厚紙に巻かれている）1巻の長さ。立て続けに手で縫うには相当の距離です。縫っていて疲れない針でなければなりません。針の硬さ、布への通り具合。わずかの差が、40メートルの間に大きな違いを生みます。また途中の糸切れも能率を下げる一因。まさに和針が本領を発揮するところです。

意外なのは、使う種類のこと。きものの仕立てでは部位によって「地縫い」「くけ」「綴じ」などの縫い方があります。いかに

もいろいろな針を使いそうに思えますが、最初から最後まで、ほぼ1本の針だけで縫えるというのです。

それは直線縫いが中心であること、縫い合わせる厚みは、たいてい布2枚分と決まっていることによります。絹用の太さであれば、針の長さは各人の好みで選ぶだけで、中でも小回りの利く短い針、「四ノ一」という長さ3センチほどの絹針を使う人が多いようです。

きものはよく「合理的」といわれます。それは往々にして着こなしや収納性に言及するのですが、このように仕立てにおいてもきわめて合理的な衣服で、和針の構造と同様、先人たちの知恵の結晶なのです。

昔は家で、自分たちのきものを縫いました。針が貴重だったこともあり、複雑な道具立てをせずとも縫い上がるよう、工夫がなされたのです。きものが日常着だった時代は、夏が終ると解いて洗い、巻いて仕舞いました。そして同様にして仕舞ってあった冬のきものを取り出し、あらためて仕立てて着たのです。その当時、プロの仕立て屋さんには、宿賃を払う代わりに「仕立てるものはないか」と聞いたそうです。腕に自信があれば、懐に針1本あれば旅が出来た、ということでしょう。

和針ときもの、そこでの針仕事は、まさに三位一体となって、日本の道具文化と衣文化、職人技とを育て上げてきたのです。



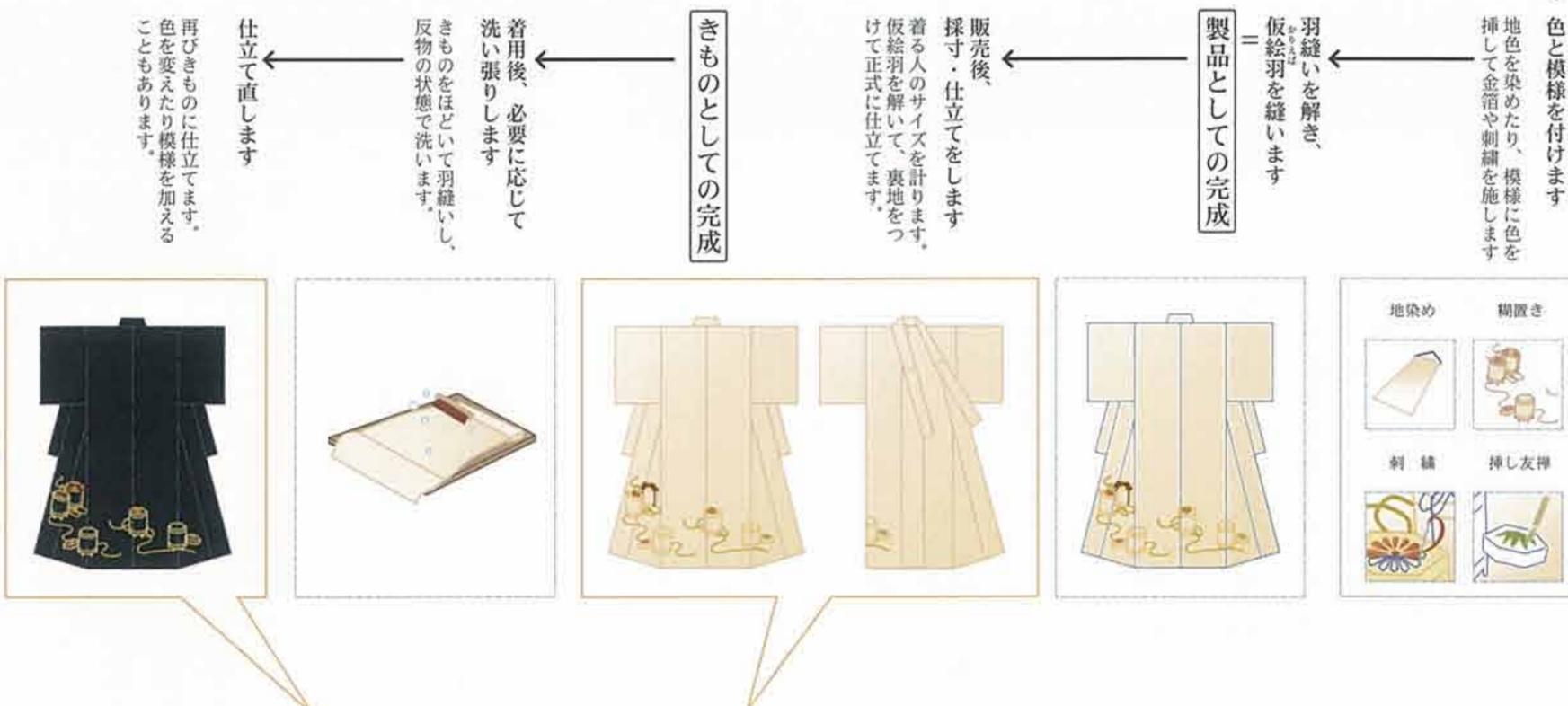
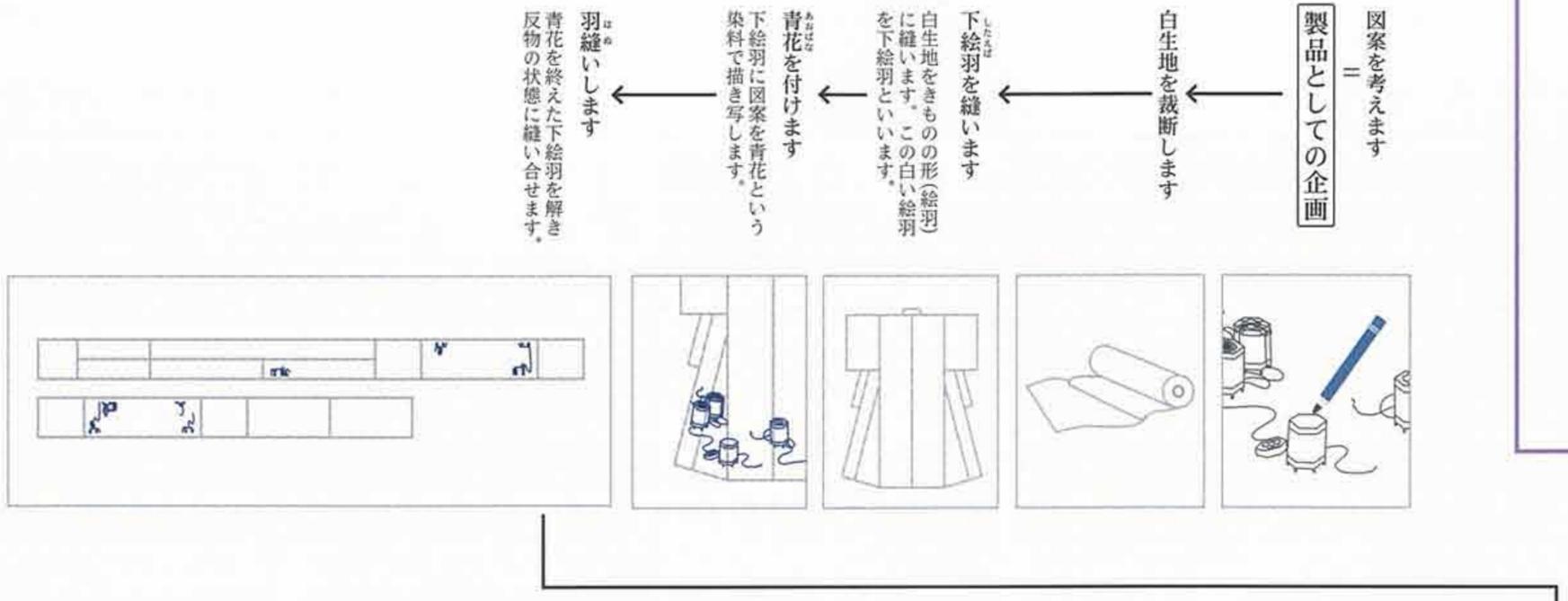
糸の色を選びます。模様にし差し掛かると、その箇所の色に合わせて、都度、糸を換えます。引き出し一杯に、さまざまな色の縫い糸が。



着たときに正面にくる上前と衤の模様を合わせます。寸法によって身頃の幅を細め、あるいは広めにしなければなりません。なるべく模様(のずれ)が目立たない脇だけで調整します。済んだら余った部分を裁ち落とします。



きものが出来るまで



この図は、色留袖を例に、図案から数々の製作工程を経て製品が完成し、その後、実際に仕立て上がるまでを示したものです。
着用後に洗い張りをし、ふたたびきものにするときも、仕立ての仕事が入ります。

小森和裁研修塾

平成のお針子さんたち



京都の西陣に、プロの和裁士を目指して
全国から若い女性の集まる塾があります。
研修期間は5年。

針の持ち方にはじまり、長襦袢からやがて
この町ならではの舞妓さんの衣裳まで、
あらゆるきものを縫い上げるまでになります。
上達するには心を磨くことだという、
塾の日常と彼女たちの表情を追いました。



仕事場では、年数によって座る列が決まっています。前頁の写真で奥の窓側が1年生で、手前側は5年生や先生の場所。右端の台でアイロンをかけているのが塾の代表、小森達男さん。左端で相談を受けている女性が、夫人の小森春代さんです。この部屋の他に、卒業生に提供された一室があって、和裁士として独立した人たちが仕事をしています。

和裁塾というところ

小森和裁研修塾は京都市上京区、千本寺之内にあります。一帯は西陣とよばれる、世界に名をとどろかす織物の地。今でこそ数は減りましたが、大小の織物屋さんが軒を連ね、機（はた）の音が絶えなかつた町です。

老舗の漬物屋などが立ち並ぶ千本通りから、西に入る路地をすすむと「御仕立いろ」小森の文字を染めた、紋暖簾のかかる建物がありました。

小森和裁研修塾の本体は、昭和5年から70年以上続く仕立て業です。きものプロ中のプロが集まる、この西陣で掲げる「御仕立処」の暖簾は、他にはない仕事の質と、高い矜持（きんぎょ）を象徴するものですが、入塾する生徒は、その暖簾をくぐり、一日目からプロ和裁士の仕事場で過ごすことになっていきます。教室で教科書をめくるのではなく、いきなり現場の空気に触れるわけです。

広々とした部屋には30人近くが机を並べて正座し、黙々と手を動かしていました。その大半は20代前半の若い女性です。入塾希望者は年に10人前後で、出身地は、地元の京都は

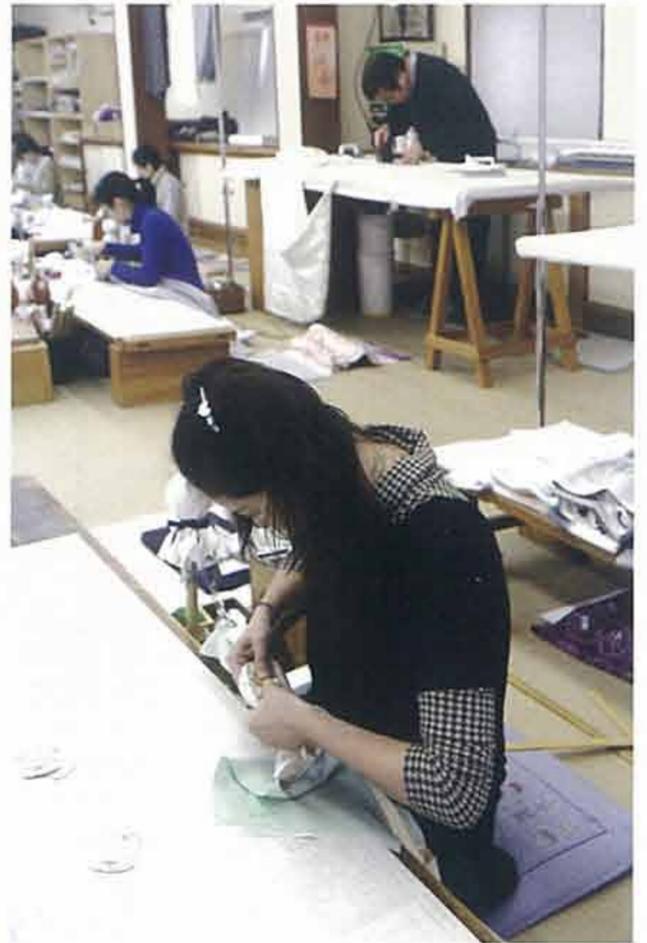
もちろん、北は青森、南は鹿児島まで。入塾にあたっては、和裁士を志す人であれば、経験や資格を問いません。

5年間で何を学ぶのでしょうか。カリキュラムにはこうあります。

「1年目・きものを知る。きもの部位を覚え、運針を徹底的に練習し、長襦袢を縫えるようになる。2年目・きものをつくり始める。ひとえからスタートしてコート、羽織、袷、帯までを。3年目・きものを楽しむ。留袖や振袖などの絵羽物や変り衿のコートをつくる」。

4年目と5年目ともなれば、さらに特殊なきものや、高級生地を扱います。そして指導者として、後輩を教えることにもなる。4年目ではもう、一人前の和裁士として仕事をす

るわけです。つまり、小森和裁研修塾は専門学校ではなく、本体と一体となる「仕立て屋」です。ですから入学金や授業料はなく、代わりに社会保険がありお給料も出ます。寮制なので食費などは差し引かれますが、ともかく「働きながら学ぶ」システム。そう、かつての日本で、手に職を付ける上で当たり前だった「修業」のスタイルなのです。



私語はとくに禁止されていないようですが、おしゃべりの声は一切聞こえません。それぞれの作業に没頭していることと、唇にはよく、針をはさんでいるからです。



仕立ての見所

よく仕立てられたきものは、見て美しいばかりでなく、着くずれしにくく疲れないものです。
仕立ての巧拙が出る部位といえは剣先(衿と衽を合せた上端)、上前の衽と身頃の付き合せ、袖口、そして襖です。剣先はすーっと伸びていること。衽と身頃は模様継ぎ目を感じさせず、合せ目は一直線であること。袖口は内側にたるみがないこと(左・右下の写真では、右側の袖がよい例)。襖はあるかなしかの曲線で角がおさまっていること、などです。



美しく仕上げられた襖は見所のひとつ



舞妓さんの衣装で綿を入れた裾をつくっているところ。お稽古用ということで、綿は少なめにしています。裾に当たる綿の端は滑りにくい真綿でくるみ、後からずれるのを防ぎます。仕立てているのは小森社長の長男で、塾でも教えている富夫さん。男性の和裁士さんは、「かけはり」の代わりに足の指を使うことが多いそうです。



仕立てに使う針はたいてい「四ノ一」から「四ノ三」ですが、綿を入れた裾には長い針を。左の写真のような打掛には、9cmもの長さの針を使います。

京都ならではの仕事

ここで1日に仕立て上がるきものは12枚前後。中には花街の衣装があり、また歴史的な小袖の復元を依頼されることもあります。

ふつうの仕立て仕事でも棲はむずかしい部位ですが、舞妓さんの衣装のように綿を入れるものはなおさらのこと。しかも着たときの裾さばきは軽やかで美しくなければなりません。数グラムの差が勝負というそれをこなせるのは、京都でもほぼ小森さん一門に限られるといえます。



上はありし日の捨男さん。仕事の間はこのような作務衣を愛用していました。左は捨男さんが仕立てた紗の道行きコート。裏地の裾を波頭模様に裁って縫いとめ、技と趣向をこらした。「和裁士としての父の意気と美意識を感じます」と、達男さんにとって大切な一枚。

受け継がれる心

現社長の小森達男さんは、名和裁士だった父、捨男さんの跡をとってこの道に入りました。13歳から和裁を始めた捨男さんは、職人として腕がよかったばかりでなく、後進の指導にも熱心で、83歳で亡くなるまでに数多くの弟子を育て上げました。達男さんの夫人である春代さんは、捨男さんの愛弟子だった縁で小森家に嫁ぎました。

捨男さんは、365日を和服で過ごすほどのものを愛していたそうです。現役の頃はもちろん一線を退いてからも、つねに何かしらの仕事に向かっていた人で、技術の研鑽に余念がありませんでしたが、周囲には折々に「和裁はたのしい」と伝えるのを忘れなかったといえます。捨男さんのその想いは、息子夫婦の達男さんと春代さん、そして孫の富夫さんへと受け継がれてきたのです。

富夫さんは和裁を習得するのの際し、父の達男さんに倣って家を出て、名古屋で修業しました。当時の富夫さんの夢は、帰ったら捨男さんと並んで仕事をする事。その夢を抱いて5年を過ごし、京都へ戻りますが、



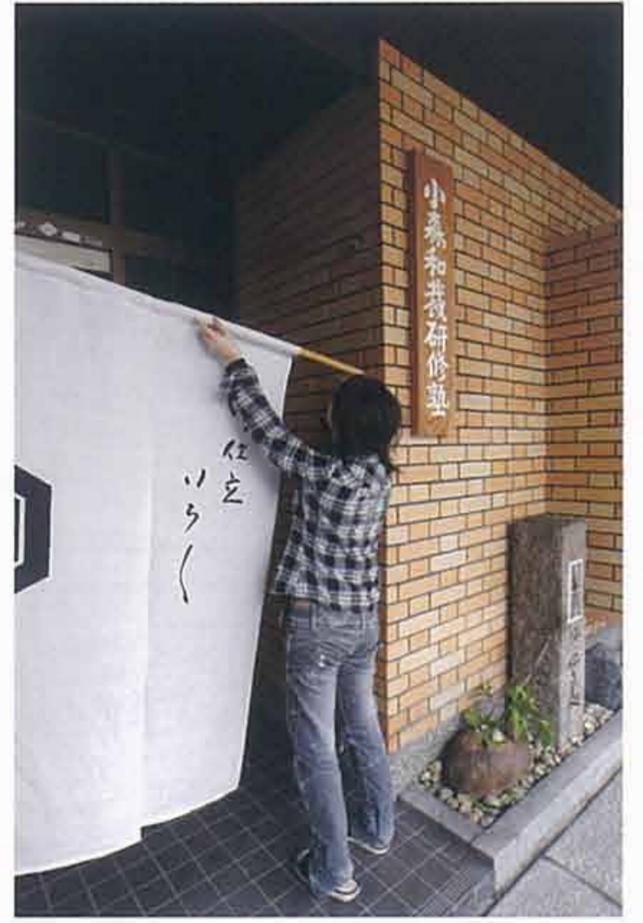
左から美香さんと富夫さん、英生さんと珠代さん。打掛の生地はどちらも、西陣の家にふさわしく金欄の丸帯地で、白無垢の生地一式とともに結納品にしたものです。美香さんと珠代さんは今も塾で活躍中。富夫さんは披露宴にあつらえた枡を針山にしています(左の写真)。

直後に捨男さんは倒れ、ほどなく亡くなりました。捨男さん自身、孫と仕事する日を心待ちにしていましたから、さぞ残念だったことでしょう。そして残された一家が悲しみから立ち直るには、やはり無心に仕事に向かうのが一番だったのです。

それから約1年後、富夫さんは結婚しました。お相手の美香さんは塾生だった女性。きもの問屋さんに勤める弟の英生さんも、両親のお弟子さんである珠代さんを見初め、両組同じ日に式を挙げました。二人の新婦は自分たちで白無垢と打掛を縫い上げ、その日を迎えたそうです。一家の慶びの姿は、捨男さんへの何よりの供養となつたに違いありません。

捨男さんはまた「和裁は手と心に貯金すること」という言葉を遺しました。和裁の技術を学ぶことは、心を磨いて礼儀を学び、文化を知ること——父の言葉を達男さんは、そのようにとらえています。

技術は、本来そのように学び、身につけるものでした。表面的にさうだけでは、血肉となつて一生を支える糧にはなりません。小森さんの塾が、昔ながらの修業方式をとるのは、それが和裁士として生きてゆくための人格を形成するからです。



1年生の朝は、玄関周りをととのえることから。お昼が近くなると、まかない婦さんを手伝って食器の準備と片付けをし、上級生が食事をしている間に仕事場の床を掃除します。



人間として美しく

塾生は棟続きの寮で寝起きします。

1年生の朝は、玄関を掃き清めて暖簾を掛けることから始まります。

食事時はまかない婦さんを手伝いますが、ご飯が炊き上がったところで、先ず盛るのは仏飯です。

見ていると、ラフなジーンズ姿ではあっても、襖の開け閉め、挨拶の姿勢、お茶の出し方等、ひとつひとつの所作が流れるように美しいことにはつとさせられます。春代さんは茶道・華道の教授でもあるので、作法によく目が届くのでしょうか。

「母親として、同じ女性として、あたたかく、そして厳しく指導したいのです」。

ひとりの和裁士として、女性として。何より人間として美しくあってほしいと、夫妻は願うのです。捨男さんの先の言葉もまさに、そのことを意味します。

一方で、今どきの若者らしい生活を取り上げるつもりはありません。日曜日、彼女たちが平日とは打って変わった流行のファッションとメイクで出かける様子もまた、嬉しいのだといいます。



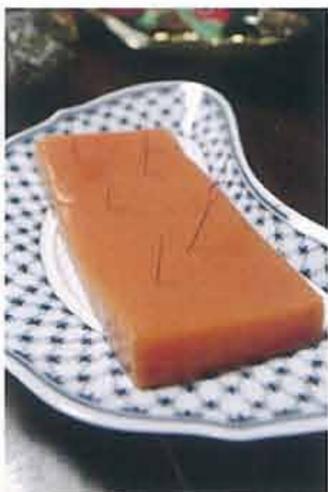
鯨尺の裏に卒業生から贈られた
伝統の寄せ書き



一人一人、おかずをよそってもらい、「おばちゃん、いただきます」。まかない婦の牧野さんは月曜から6日間、45人分の食事を切り盛りし、土曜日には翌日分のカレーもつくります。



塾は全寮制。「塾生は生徒である以上に家族」という考えで営まれています。そこには技術も協調性も、自然と育まれる空気があります。



茶道や華道といった伝統文化を身につけることも、一流の和裁士になる上で大切な教養。小森和裁研修塾では、そうした授業も受けられます。また、京都の町そのものが、日本文化を学ぶ教室でもあります。



針供養の日にはこんにやくご飯が炊かれ、祭壇にも上がります。折れた針は一年間でめいめいコップ1杯ほどに。程度がよいものは待ち針に使います。

明日の和裁士をめざして

2月8日。仏壇の前に祭壇が置かれ、こんにやくが供えられました。この日は針を供養するのです。

塾生たちは仕事の手をとめ、針を持って祭壇の前に並びます。そして針をそつとこんにやくに刺し、一年の労をねぎらって感謝します。もちろん、技術の上達を願うことも忘れません。

その他にも事始、雛祭、七夕、祇園祭、五山の送り火……。日本の、そして京都の伝統としきたり、それぞれの意味を、行事を通じて学びます。祇園祭の宵山へは浴衣で、秋のお祭りや年始のパーティーにはききもので、と、和装のおしゃれをたのしむ上でも、季節を意識し、歳時記を大切にします。

年間スケジュールといえば、和裁技術のコンクールも大きな行事です。いくつかのレベルがあつて1年目から参加しますが、上級生はみな、全国大会での上位入賞、日本一をめざします。そうした輝かしい成績を納めた先輩に憧れて、下級生もまた、上へ上へとほげむのです。

コンクールで勝つことがすべてで

Access, please!

入塾についての詳細は、塾のウェブサイトで！
教育課程のことはもちろん、寮のこと、
京都の町の魅力もいろいろ紹介しています。
<http://www.komori-wasai.co.jp/>



はありません。それでも、勝てばプロの和裁士としてスタートに立つことが出来る、そう考えるのです。

きものを着る人も、着る機会も減り続ける一方です。安くなければ売れないからと、化繊をミシンで縫ったきものも増えてきました。

それでも、和裁士になろうとする若い人は後を絶ちません。「きものが好き」「子育てと両立できると思っている」「和裁士の母と一緒に仕事がしたい」「日本の文化を和裁を通じて担いたい」。

同世代の一員として、富夫さんはいます。

「きものは一つとして同じものはありません。生地によって、納める相手によって、縫い方も変わります。それを針と糸だけを使って一人で仕上げる——人間の手で覚えるしかないことです」。

「この仕事の面白さ、すばらしさを、可能性のある若い人にわかってもらうために、祖父と両親から教わった、精一杯のものを僕なりに伝えてゆくつもりです」。

○ 小森和裁研修塾には、この春も、それぞれの夢をもって明日の和裁士をめざす、若人たちが入門します。

5年間で学ぶこと

1年生は、きものを知ることから。

- 技と知識の基本を習います。
- きもの各部位の名称を覚える
 - 運針を徹底的に練習
 - 部分縫いを行い基礎技能を養う
 - 長襦袢を縫えるようになる

2年生では、きものをつくり始めます。

- 部分縫いから、全体的な基礎技能習得へ進みます。
- 一重のきものを中心に
 - 各種コート
 - 羽織
 - 袷のきもの
 - 名古屋帯、袋帯、芯を入れる角帯

3年生は、きものを楽しんでいます。

- 基礎から応用へ。特殊なきものも創ります。
- カシミアやビロード、レースなどの素材を用いたコート類
 - 留袖や振袖で絵羽のあわせがとて緻密で難しいもの
 - 襟の形が特殊な変り襟のコート
 - 半纏ほか綿を入れるもの

4年生は、きものを教えながら。

将来のプロ・指導者として、教えながら磨きます。

- 留袖や訪問着、付下げなどの袷のきものを中心に
- 大島紬や結城紬のような高級生地、綸子やちりめんの振袖



取得できる資格のこと

和裁の技能はさまざまな方面で必要とされており、国や業界による検定と認証が行われています。小森和裁研修塾では、これらの資格取得に高い実績があり、毎年優秀な和裁士が輩出しています。

国家技能検定

一定の基準で技能を検定し、国として証明する制度。厚生労働省が実施する国家資格です。実務経験に応じて一級〜三級まであり、和裁士として必ず取得しなければならない資格です。

*一級技能士、二級技能士、三級（技能士補）

職業和裁技能検定

社団法人日本和裁士会が実施します。制定は国家技能検定よりも古く、権威の高い資格。実務経験に応じて一級〜三級まであります。

*一級和裁士、二級和裁士、三級和裁士

職業訓練指導員

職業能力開発施設や職業訓練施設で、就職や転職を希望する人々に対して、必要な専門的知識や技能を教える仕事です。試験は厚生労働省が実施。国家技能検定で1級または2級をもつ人は実技試験が免除されます。

和裁教員免許

将来独立し、和裁を指導する人に必要な資格です。社団法人日本和裁士会が発行します。

編集後記

きものについて、柄や色使い、価格については、聞きかじってはいるものの、他に類を見ない、機能や能力の高さについて、知らない、あるいは忘れていたが多すぎます。

わずか一本の針で日本のきものがつくられていること。それは機能的なことでもあり、また、洗い張りや染め直しに対しても、容易であることでもあるから、リサイクルにも優れているのです。

そして、百貨店なり呉服屋さんできものを買い求めたとしても、「仕立て」という最も重要な最終工程には、既製服に麻痺している現代人にとっては、忘れ去られていることだったのです。

しかし、日本の文化はそう容易に絶たれるものでないことを「小森和裁研修塾」で知らされました。

和裁士を目指す若い女性がこれほどいること。また、それほどの仕事があること。また、まだ、日本のきもの文化は、彼女たちによって、しっかり守られていくことでしょう。

いまどき、技術を身につけるのに授業料を払う道しか知らなかった者にとって、給料をもらい、社会保険に入りながら学ぶという、研修塾の仕組みに驚かされましたが、それは、和裁士・小森の技術の継承に対する、熱い思いがそうさせていたのです。

(K)



小森和裁研修塾

<http://www.komori-wasai.co.jp/>

株式会社 小森

〒602-8311
 京都市上京区寺之内千本西入ル下ル994-8
 TEL 075-462-6748 (代)
 FAX 075-462-6762
 e-mail info@komori-wasai.co.jp

市バス 京都駅から 6系統・206系統「乾隆校前」
 50系統「上七軒」
 四条大宮から 46系統「乾隆校前」
 三条京阪から 59系統「乾隆校前」

タクシー 地下鉄烏丸線・今出川駅から10分
 JR・京都駅から20分、二条駅から10分
 京阪本線・出町柳駅から10分

